九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『封神演義』をめぐる明末士人の出版活動と読書態度

岩崎, 華奈子

https://hdl.handle.net/2324/4474910

出版情報：九州大学, 2020, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

氏　　名　：岩崎　華奈子

論 文 名　：『封神演義』をめぐる明末士人の出版活動と読書態度

区　　分　：甲

論　文　内　容　の　要　旨

明代の末期に成立した『封神演義』は、殷周革命、いわゆる武王伐紂の伝説的故事を題材とし、神仙妖怪を多数登場させ、方術や宝物によって繰り広げられるさまざまな戦闘を描く、全百回の章回小説（現代の連載小説のように回を分けた構成をとるもの）である。近代には魯迅によって『西遊記』と同じ神魔小説に分類されている。この小説は当時の民間信仰や庶民文化を反映しているだけでなく、広く人口に膾炙して後世の宗教や文化にも大きな影響を与えた。ゆえに、従来は主に宗教学や民俗学的な研究において、重要な資料として位置づけられてきた。しかし文学研究においては、さきの魯迅以来、その評価はあまり高いものではなく、十分には検討されて来なかったのが実情である。該書が刊行された明代末期は、空前の経済発展に伴い、折からの出版技術の向上も相俟って、さまざまな実用書や戯曲・小説など庶民の娯楽に供する書物が数多く生み出された時期である。本論文は、かかる当時の社会的背景を念頭に、『封神演義』の出版と享受について考察を行った結果である。

序章「『封神演義』研究の現状と課題」では、まず前提として、当時の小説が科挙を目指した生員（受験生）を主な読者として出版・販売されていたことを確認し、そのうえで該書に対する従来の評価や、いくつかの注目すべき先行研究を整理、紹介した。

第 1 章「『封神演義』の序文撰者（一）李雲翔」では、現存最古の明刊本とされる舒本（国立公文書館内閣文庫蔵）の巻頭に序文を掲げる李雲翔について、その事績を考察した。従来の研究では解明されていなかった、この人物のその他の著作、および交友関係を調査した結果、李雲翔は万暦 46 年～崇禎 13 年（1618～1639）ごろ、南京秦淮の妓楼を主な拠点として活動していたことを明らかにした。

第 2 章「『封神演義』の序文撰者（二）周之標」では、もう一つの序文の寄稿者である周之標について、同じくその事績を考察した。周之標は万暦 44 年～順治 12 年（1616～1655）の間、主に蘇州を拠点として活動したことが明らかとなった。また、妓楼に通じ、詞曲の創作を得意とし、明末の通俗文学の旗手として名高い馮夢龍との交友があったことなど、第 1 章で取り上げた李雲翔と多くの共通点が認められることを示した。

第 3 章「周之標の声望と人脈――尺牘集『四六琯朗集』初探」では、中国の人民大学図書館に現存する稀覯本『四六琯朗集』の熟覧調査をもとに、そこから看取される周之標の当時の声望と人脈について考察した。書簡文例集である該書には、生員の全国組織であった復社のメンバーが多数関与しており、周之標の文名が復社のネットワークを背景に、全国に広がっていた可能性を指摘した。また該書を手がかりに、周之標が万暦年間の内閣首輔申時行（1535～1614）と縁戚関係にあることも明らかとなった。申氏一族は、周之標の人脈形成に大きな影響を与えただけでなく、江南随一の劇団を擁しており、周之標の戯曲作家としての修養にも重要な役割を果たしたと考えられる。

第 4 章「周之標序の検討」では、上の第 2・第 3 章の考察結果を踏まえ、『封神演義』に寄せられた周之標の序文の内容を検討した。一般的に、通俗小説の序文には、その作品の出版経緯や宣伝的内容が直截に書かれるものであるが、周之標序は敢えて陰陽五行説に基づいた曖昧模糊とした文章を記している。そのなかに、『封神演義』という虚構を通して現実の社会問題を論じ、明朝の為政者に対する批判が隠されていることを明らかにした。周之標はこの序の含意が理解できる知識人を、この小説の読者として想定していたと考えられる。

第 5 章「徳聚堂刊上図下文の文簡本について」は、現存最古とされる舒本以前の刊本の存在に迫ろうとするものである。ハーバード燕京図書館が所蔵する徳聚堂本は、封面に金陵（南京）と銘打つ書坊でありながら、福建刊本に特有の上図下文の版式を持ち、また本文を節略して紹介する文簡本と称されるものである。この徳聚堂本について、他の文繁本の本文と校勘してみると、該本が現存最古とされる舒本よりも古いテキストを部分的に保存している、重要な版本である可能性が見いだされた。また書坊徳聚堂について調査し、該本が福建から江南に将来された版本である可能性も指摘した。

第 6 章「宿命と情義の衝突――『封神演義』における宿命論の意義」は、従来『封神演義』の欠点とまで言われる宿命論に注目し、その機能と意義を考察したものである。宿命論は物語の展開を確実に結末（周の勝利）へと導く機能を有している。しかし作中では、宿命を奉じる周側と、情義を以てこれに抗おうとする殷側の衝突が細やかに描かれ、どちらかといえば情義に重点を置いた描写が行われてゆく。神魔の闘争という非現実な物語の中に描かれた、宿命に翻弄される登場人物の極めて人間的な心情描写が、該書に精彩を加えているのである。

終章「中国文学における『封神演義』の位置づけ」は、本論文の総括である。序文執筆者の一人周之標の事績から類推すれば、この小説ははじめ福建で製作され、江南において刊行された可能性がある。福建刊本の特徴である上図下文の版本に、舒本を遡る本文が保存されていることが、それを裏付ける。『封神演義』は生員を中心とした中下層の知識人によって出版され、繙読された。彼らは討伐される殷に衰退しつつある現実の明王朝を重ね合わせ、宿命に抗う殷側の人々の抵抗に共感を抱いたと考えられる。『封神演義』は、彼らの現実に対する不平不満や、知識人としての自負と憂世の感情を、発散し、慰める文学として享受されたのである。